

知的障害をもつ子どもの自己実現

—スウェーデンの知的障害児バイオリン演奏グループ「ラムセバンド」の活動を中心に—

Birgitta Strömberg¹ · Helena Wattström² · 是永かな子³

The Self-Actualization of the Children with Intellectual Disability: Focusing on the Activity of Violin Playing Group “RAMSEBAND” by the Children with Intellectual Disability of Sweden

By violin teaching which the music teacher of Sweden developed, the children with intellectual disability acquired the playing method of the violin in which the mastery was difficult until now. Afterwards, violin-playing group “RAMSEBAND” by the children of the school for the intellectual disability was formed. The playing of the band was carried out even in not only Sweden but also Europe, Japan. Children gain the self-confidence through the playing activity, and they are finding new possibility of themselves. In this paper, by examining the activity of “RAMSEBAND”, it is made that the important point was examined in educational activity of the children with intellectual disability to be a purpose. This paper was examined in following viewpoints. First, features of violin teaching “RAMSEBAND Method” for the children with intellectual disability were summarized. The development of the activity of “RAMSEBAND” was shown in the second. The significance of the activity of “RAMSEBAND” was examined in the third.

The result was the following.

Features of “RAMSEBAND Method” are to make the instruction intelligible using color and numeral, to possibly simplify the challenge of each stage, to systematically constitute each stage and challenge.

The keyword of “RAMSEBAND” is “nothing is impossible”. “RAMSEBAND” has embodied the conception “all humans have the equal value regardless the disability” through the violin playing.

The music in which the children play music has got not only Sweden but also high evaluation the abroad. The evaluation from the other has been connected with self-confidence for children. On the basis of the self-confidence, the self-affirmation of the child does be formed.

In short, the activity of “RAMSEBAND” seems to contribute for the self-actualization of the children with intellectual disability by using the music.

1. はじめに

スウェーデンの音楽教員が開発したバイオリン教授法により、従来習得が困難であるとされていたバイオリンの演奏法を知的障害をもつ子どもが獲得し、バイオリンの演奏ができるようになった。その後、知的障害をもつ子どもによるバイオリン演奏グループ「ラムセバンド」が結成された。ラムセバンドはスウェーデン国内のみならず、ヨーロッパや日本でも演奏活動を行っている。子ども

¹ Kulturskolan, Violinpedagog

² Barn-och utbildningsområdet Öjersjö, Rytmikpedagog

³ 高知大学 教育学部 学校教育教員養成課程 障害児教育コース

は演奏活動を通じて自信をつけ、自分自身の新たな可能性を見出しているのである。

以上をふまえて本稿では、「ラムセバンド」活動の検討を通して、知的障害をもつ子どもの教育活動において留意すべき点を考察することを目的とする。

本稿は以下の視点に従って検討する。第一に、知的障害をもつ子どもに対するバイオリン教授法「ラムセバンドメソッド」の特徴について概述する。第二に、ラムセバンドの活動の展開を示す。第三に、ラムセバンドの活動の意義について検討する。本稿は、2004年10月に日本で行われたラムセバンドの活動に関する講演の際に、音楽教員¹ビリギッタ・ストロームベリイとパティレ市学校音楽教員²ヘレナ・ヴァツストロームが準備した資料³をもとに執筆されている。資料の翻訳と補完的な聞き取り・考察を是永が担当した。

2. ラムセバンドのメンバー構成と協力教員の役割分担

ラムセバンドとは、スウェーデン第二の都市イエーテボリ市近郊のパティレ市⁴にあるオイレショー学校 (Öjersjö skolan ; オイレショーストローグド学校 Öjersjö Storegård とオイレショープルン学校 Öjersjö Brunn の2校からなる) に就学している、知的障害をもつ子どもによって編成されたバイオリン演奏グループである。

ラムセバンドの結成は1995年である。当初のメンバーは15名であった。2003年段階ではラムセバンドのメンバーは10名で、年齢は10歳から17歳、3人の女子と7人の男子で活動していた。そして2004年には再度メンバーの入れ替わりがあり、新しいメンバーを含めた10名で編成されている。

ラムセバンドの活動を支えている教員グループは以下である。

表1 ラムセバンド活動に協力している教員グループ

名前	役職
ビリギッタ・ストロームベリイ (Birgitta Strömberg)	文化学校教員
ヘレナ・ヴァツストローム (Helena Wattström)	パティレ市学校音楽教員
スサンヌ・ベルイルンド (Susanne Berglund)	特別教員
マツ・カールソン (Mats Karlsson)	特別教員
エヴァ・ロセーン (Eva Rosén)	特別教員
シャスティーン・ロセーン (Kerstin Rosén)	特別教員
クリスティーナ・ルドウ (Kristina Rudöw)	オイレショー学校長

教員にはそれぞれ役割分担がある。ストロームベリイはバイオリンを担当し、ヴァツストロームはピアノを担当して、それぞれが子どもにバイオリン演奏法を教授する。

ベルイルンドは、知的障害教育の専門家である特別教員⁵であり、知的障害の子どもに分りやすい教授方法を考へて、バイオリンの指導を援助する。例えば、子どもの前に立って、子どもの様子を把握しながら、楽譜をリズムに合わせて指し示す役割などを担当するのである。ヴァツストロームによると「ベルイルンドは音楽教員と子どもの間の橋」であり、子どもに分りやすい教示方法の工夫や、知的障害をもつ子どもの指導において重要な役割を担っている。

カールソンとエヴァ・ロセーンも特別教員である。彼らは一人では演奏が困難な子どもの側に居て、子どもに直接援助する役割を担う。また彼らは、バンドメンバーの保護者とも連絡を取っており、学校内外の子どもたちの様々な状況に対して注意を払っている。

シャスティーン・ロセーンは特別教員ではあるが、直接指導に携わるよりもむしろラムセバンドの演奏活動の調整・交渉役を務めている。彼女は日本で約10年生活していた経験を活かし、日本で

の演奏・講演活動も成功させている。

ルドウ校長は学校における活動全体に責任を持っているため、オイレショー学校の子どもに対してどのくらい「ラムセバンドのための時間」を設定するかを決定する⁶。これらのチームワークはとても重要である。

3. ラムセバンドが結成されたオイレショー学校について

オイレショー学校は、通常学校と知的障害学校が併設されている9年間一貫制の義務教育学校＝基礎学校である。スウェーデンの基礎学校の多くは知的障害学校を併設する「場の統合（ローカルインテグレーション）」の状態にある。そのような環境の下、障害のみならず特別な援助を必要とする子どもに対しては、一人ひとりのニーズに応じた教育の保障をめざすインクルージョン教育が進められている。インクルージョンの一要素として統合教育が位置づけられるが、オイレショー学校は様々な教育的統合を試み、独自のインクルージョンモデルを開発している⁷。

オイレショー学校の知的障害学校は軽度知的障害対象の知的障害基礎学校であるため⁸、子どもは通常学校の教科と同様、英語、スウェーデン語、歴史、体育、音楽などを学んでいる。

ルドウ校長は、オイレショー地区の障害児学校に責任を持つ校長である。オイレショー学校の知的障害学校の規模は、2002年/2003年度には登録人数で104人であった。内33人がオイレショーストーレゴード学校に、36人がオイレショーブルン学校に就学、14人はパティレ市内の他の学校に個別に統合されていた。21人はパティレ市以外の学校で教育を受けていた⁹。

4. ラムセバンドの結成

ラムセバンドはパティレ市のオイレショー学校と、文化学校との共同プロジェクトとして1995年に始まった。文化学校教員のストロームベリイとパティレ市の学校の音楽教員ヴァツストロームが中心となって「何か楽しいこと」を始めたいという気持ちから着手されたプロジェクトであった。楽器がバイオリンになった一番の理由は「偶然」である。それはストロームベリイが、バイオリンの教員であったためである。もちろん、他の理由としては、バイオリンは弦がゆるいので押さえて音を出しやすいこと、持ち運びが比較的容易であることがあげられる。以上の理由から知的障害をもつ子どもにバイオリンを教える取り組みが着手されたのである。

ラムセバンド・プロジェクトの開始当初バンド結成にあたっては、特別な選考を行わなかった。「このようなバンドを作るのですが、参加したい人はいませんか」と呼びかけ、15人の子どもが立候補したのである。才能のある子どものみを選んだのではなかった。そして、プロジェクト開始時には知的障害をもつ子どもへの教授という観点から、障害児教育の専門家である特別教員もプロジェクトに加わった。

5. バイオリン教授法「ラムセバンドメソッド」の確立

知的障害をもつ子どもにバイオリンを教授するために、さまざまな工夫を行った。以下に手順に従って紹介する。

5. 1 バイオリンを弾く前の準備

直ぐにバイオリンの弾き方を学ぶのではなく、最初は準備的な作業に十分な時間を割いた。準備的な作業とは、楽器の箱を開ける、バイオリンを取り出す、バイオリンの各部位の名称と機能を学ぶ、バイオリンを弾いてない時のバイオリンの持ち方を学ぶ、バイオリンを弾く時のバイオリンの持ち方を学ぶ、バイオリンを正しく首で支える、弓を正しく持つなどである。それらの基礎的なこ

とに時間をかけて取り組んだ。

それはレッスンにおいてルーチンを確立することが重要であるためである。準備的な作業はその1つであった。レッスンの最初と最後の挨拶はみんなで声を掛け合って手を叩き合うなど、様々な作業をいつも同じように行った。子どもはルーチンを確立することによって安心できるのである。これは知的障害をもつ子どもにとって重要なことである。上下左右を理解するのも困難であったため、方向の学習にもかなりの時間を割いた。

5. 2 弓の使い方の学習

弓の持ち方は、スズキメソッドが良いと思われたため、それを採用した。弓の使い方を学ぶにも、最初はバイオリンを用いなかった。最初はトイレットペーパーの芯を使ったのである。トイレットペーパーの芯に弓を通し、同じ位置で弓を上下する練習を行うのである。それは知的障害をもつ子どもにとって、弓を一定の速度で上下するのは非常に難しいからである。

次に、弓を車の「ワイパー」のように左右に振る練習をした。そして、弓を「エレベーター」のように上下に動かしつつ、弓を安定的に保持することを練習した。弓を左右、上下への移動させる動作を、3つのコードのみを用いた音楽にあわせて、ゆっくり行ったり、早く行ったり、一つ一つの動作の間隔を空けたりして、繰り返し練習した。

5. 3 弦の弾き方の学習

バイオリンの4本の弦の下に4色のテープを貼り、色によって弦の識別を容易にした。例えばそれは、G弦を緑、D弦を赤、A弦を青、E弦を黒といった具合である。

さらにその弦に、その文字から始まる人の名前をつけた。Gはグスタフ (Gustav) 君、Dはデヴィッド (David) 君、Aはアンナ (Anna) さん、Eはエヴァ (Eva) さんとした。色と名前のルールは写真にして教室に掲示し、弦について毎日学習したのである。

5. 4 楽譜の工夫

楽譜は図1に示すように、それぞれの弦につけた名前の大文字を書いた。楽譜を書くときは、Gは対応する緑色で書くといった工夫もした。

```

DDDD | DDAA | AAAA | AADD
DDDD | DDGG | GGDD | AADD
GGDD | AAD_ |

```

図1 楽譜曲名：Vi cyklar (私達は自転車に乗る)

- それぞれGを緑、Dを赤、Aを青、Eを黒で書く。
- Dの_ (下線) は音を延ばす記号である。

5. 5 ラムセバンドの練習

ラムセバンドの練習は、週2回学校で行われている。バイオリンは学校に置いてあり、家に帰って練習することはない。練習も強要するのではなく、遊び心を常に取り入れた形態を心がけた。ゆっくり、そしてスモールステップで指導を行った。

5. 6 最初の練習曲

どの曲を、どのキーで、どういう形態で演奏するのか、これらもかなりの時間をかけて考えた。そして最初の練習曲として「ラムセバンドブルース」を作曲した。ラムセバンドブルースはそれぞれの弦を8回弾くことによって成立している曲である。ラムセバンドブルースを忍耐強く、そして、楽しく練習した。最初の半期はずっとこのブルースの練習をしたため、子どもは注意深く学び、そして一旦覚えるとその曲を忘れることはなかった。

5. 7 指の練習

最初の練習曲によって弓の使い方に慣れてくると、指を使って演奏する練習に移行した。指を使って弦を押さえ、一つ一つの音を出していき、だんだんとバイオリンが弾けるようになっていくのである。

指を使って演奏するために Sheila Nelson による「カウボーイコーラス」を練習曲に選んだ。それは1つの弦に3つの指を使う曲であって、繰り返しが多いため、練習にはとても良い曲であった。

指の練習は、指に1、2、3、と番号を直接書いて、番号によって指の位置を確認するという方法をとった。それに伴い、楽譜は以下のような表記にした。

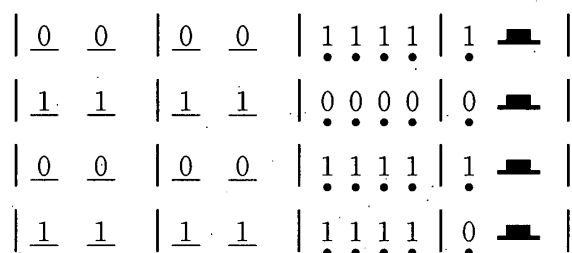


図2 楽譜曲名：Säg inte nej（嫌だと言わないで）

- 0は指で弦を押さえない、1は1の指で弦を押さえる。
- 数字は、G弦であれば緑、D弦は赤、A弦は青、E弦は黒と色分けされている。
- ■ は小休止。
- _ (下線) は長く、● は短く演奏する。

しかし長時間くり返し練習したにもかかわらず、指を使って演奏することは容易には上達しなかった。多くの子どもにとって、左の指を弓と一緒に動かすこと、楽譜を見ながら指で正しい弦を押すことは大変困難であった。バイオリンを持ち、同時に弓を押さえ、正しい弦を左手で押すことを行わなければならない。知的障害をもつ子どもにとってそれらはあまりにも複雑すぎて、考えすぎてしまうのである。

5. 8 個別のニーズへの対応

「カウボーイコーラス」を練習している時、教員はフレドリック（仮名）という一人の男子生徒が指を使って演奏することを習得していることを発見した。彼は教員の勧めによって特別なバイオリンレッスンを受けるようになり、ストロームベリイが教鞭をとる文化学校に継続的に通うことになった。その後もう一人の男子生徒カール（仮名）も、文化学校のストロームベリイのバイオリンレッスンを受け始めた。現在フレドリックとカールは、ラムセバンドのレパートリーの多くの曲においてソリストを務めている。彼らの楽譜はやはり形や色やシンボルで書かれているが、そのよう

な援助もあって、彼らはとても上手に主旋律を弾くことが出来ている。ヴァツストロームはピアノのリズムで、ラムセバンドはバンド全体のリズムで、ストロームベリイはストロームベリイのバイオリンのリズムで、フレドリックはフレドリックのリズムで演奏し、それが共鳴している。カールは時々「指揮者」の役も担当する。そして現在、もう一人の男子生徒リーヌス（仮名）が文化学校でバイオリンレッスンを受け始めた。

5.9 次の段階への展開

正しい弦を押さえること、同じテンポで演奏することなどの練習を多く積み重ねて、演奏を行う。しかしグループとしてみんなと一緒に演奏を始め、一緒に演奏を止めることはとても困難であった。そのため全ての段階を長い時間をかけて練習し、とても忍耐強く指導を行った。

そして現在ラムセバンドは多様なレパートリーを持つに至っている。スウェーデンのABBAやポップミュージック、クラシックミュージック、スウェーデンの民族音楽などである。教員らは常に新しい練習曲を見つけるよう心がけているし、同時に伝統的な曲も何度も繰り返して練習している。新しいリズムや異なったテンポ、異なった表現なども開発している。バンドの全ての子どもが様々なスタイルの音楽を演奏することを楽しんでいる。彼らは全ての種類の音楽が好きである。

現在は新しいリズムや表現にも挑戦している。そして、習得の困難さゆえに一旦中断した指の訓練も再開した。指の練習に際しては、主旋律パートと伴奏パートの2つにグループ分けした。レッスン時間の半分はグループ分けをして練習を行っている。ただし両方に平等に対応するよう心がけている。このグループ分けは功を奏し、伴奏のグループも簡単な曲ならば指を使って弾けるようになってきている。

5.10 メンバーの交代

2003年には、何人かの従来のメンバーが高校進学とともにラムセバンドを去り、5人の新しいメンバーが加わった。そのため、新たなバンド構成を考える必要に迫られた。1つのアイデアは、例えば「ラムセバンドⅡ」のような新しいバンドをスタートさせることであった。しかし結果的には新しい子どもをバンドに包括して、一緒に指導を行うことをめざした。新しいメンバーの練習を毎週木曜日に行い、従来のメンバーの練習を金曜日に行った。ところが新しいメンバーはとても早く様々な技法を習得したので、その後は全ての子どもと一緒に練習を行うことにした。現在その方法はとても順調である。

従来からのメンバーは新規メンバーの良いモデルになっており、メンバー自身もそれを楽しんでいた。例えば演奏旅行に行く際には、従来のメンバーが新規メンバーに気を使う様子も見られたのである。

ラムセバンドは多くのコンサートを行っているが、それは新規メンバーに対しても良い教育になっている。なぜなら、コンサートを目標として練習に励むことが出来るし、バンドとして他者を意識して一緒に演奏することが楽しいと思うことも出来るからである。

6. ラムセバンドの活動の展開

1995年以降のラムセバンドの活動実績は以下である。

表2 1995年以降のラムセバンドの活動

1995年	知的障害児にバイオリンを教えるラムセバンドメソッドを開発し、知的障害をもつ子どもを対象に「ラムセバンド」を結成。
1995年以降	スウェーデン国内で演奏会を開催。
1999年	教員グループがラトビアの教員と交換事業を実施。「ラムセバンド」と教員グループがラトビアを訪問。
2001年4月	ルドウ校長とロセーン教員が日本を訪問。神戸ベイシェトランドホテルを始め、日本各地で「スウェーデンの障害児教育」に関する講演を行う。
2001年9月	ルドウ校長とロセーン教員が日本を訪問。日本特殊教育学会第39回大会（香川大学）などにおいて、教育講演（シンポジウム）「スウェーデンのインクルージョン教育について」を行う。
2002年1月	「ラムセバンド」のCDを作成・販売。
2002年3月 ～4月	「ラムセバンド」と教員グループが日本を訪問。スウェーデン大使館を始め、徳島よんでんプラザ、名古屋教会、愛知県立三好養護学校、はんしん自立の家、神戸ファッション美術館オルビスホールなど日本各地で演奏会と講演を行う。
2003年1月	「ラムセバンド」と教員グループがブリュッセルを訪問。「ヨーロッパ障害児・者年」のオープニングセレモニーにスウェーデン王女のヴィクトリアとともに出席。ラムセバンドは代表で演奏を行った。
2003年3月 ～4月	「ラムセバンド」と教員グループが日本を訪問。スウェーデン大使館と港区国際交流協会共催のコンサートを開催したり、淡路夢舞台国際会議場メインホールでのコンサートを開催したり、またとちぎ福祉プラザや東京の教会などでも演奏を行った。
2004年9月 ～10月	教員グループが日本を訪問。東京学芸大学附属養護学校、滋賀大学附属養護学校、はんしん自立の家など日本各地で講演・交流を行う。

次に世界の各都市での活動の状況を紹介する。

6.1 ラトビア

1999年に教員グループはラトビアのリガの教員から、演奏とラムセバンドメソッドに関する講演の招待状をもらった。それは教員の交換事業の一貫であった。準備の前段階としてラムセバンド教員グループはラトビアからの教員を3人引き受けて、音楽教育の方法論を提供した。彼らはラムセバンドを何度か訪ねて、知的障害をもつ子どもに対する教授方法を学んだ。その後ラムセバンドはラトビアを訪問することとなった。

ラトビアに行くことはラムセバンドと教員グループにとって、とても大きなステップであった。子どもの多くは飛行機で外国に行った経験が無かった。この旅行はスウェーデンのテレビや新聞にも取り上げられたが、ラムセバンドのメンバーは上手にマスコミにも対応していた。教員グループの方が神経質になり、ストレスを感じていた。知的障害をもつ子どもが異なった条件下で過ごすことは大変困難であるにもかかわらず、ラトビアを旅行をすること、ラトビアに滞在すること、ラトビアで演奏をすることは大きな成功を修めた。

その後、研修を受けた教員らはラトビアにおける「ラムセバンド」を結成した。スウェーデンのラムセバンドはそのように彼らに影響を与えられたことをとても誇りに思っている。ラムセバンド関係者の希望は、ラムセバンドの活動がラトビアの知的障害をもつ人の「目を開く」ことに貢献する

ことであった。ラムセバンドは「全ての人が同じ価値をもつ」ということを体現しているのである。

6. 2 日本

ラトビアの後、ラムセバンドのメンバーは2002年と2003年に日本に行く機会を得た。スウェーデンから遠く離れた国に行くことは、教員にとっても、子どもにとってもとても興奮する出来事であった。そしてこの旅行もとても成功した。ラムセバンドのメンバーは日本や日本人をとっても好きになった。彼らは「日本に滞在したい」と言っている。ラムセバンドで旅行する時は親は同行しないにもかかわらず、である。

6. 3 ブリュッセル

2003年1月にラムセバンドはブリュッセルの「ヨーロッパ障害児・者年」のオープニングセレモニーに参加し、演奏を行った。コンサートの後、招待されていたスウェーデン王女のヴィクトリア王女とともにディナーに参加し、王女と話す好機も得た。

7. 「ラムセバンド」によるバイオリンコンサートの実際

ラムセバンド初のコンサートは、イエーテボリ市の大きな展示会において行われた。初めてのコンサートにもかかわらず、彼らはステージ上でとてもリラックスして、全く神経質な様子を見せなかった。半分のグループは座って他のグループの演奏を聞き、そして交代してパートを変えて演奏するなどの形態をとったが、これはそれぞれがメンバーの演奏を確認するのにとても重要であったと考えている。

ラムセバンドの曲のレパートリーは多数ある。それらを組み合わせてコンサートを行うのである。以下に、2003年4月に日本で行われたスウェーデン大使館と港区国際交流協会共催のコンサートの様子を紹介する。

当日、コンサート会場は満席であった。ラムセバンドは、ラムセバンドメソッドの紹介も交え、十数曲とアンコール曲を演奏した。曲のレパートリーは、スウェーデンの民俗音楽や、ABBA など、バリエーションに富んでいた。演奏は主旋律を弾く子ども、伴奏を担当する子どもなどに分かれていたが、演奏の上手、下手ではなく、それぞれの得意な部分が担当できるように割り振られていた。ソロでの演奏や指揮に挑戦する場面があったり、みんなで振りを統一して楽しく踊りながら演奏したり、歌ったりと、コンサートの構成や演出に工夫が凝らされていた。全体として音楽教員の専門性が発揮され、完成度の高い演奏になっていた。自己紹介も、日本語で言える人は日本語で自分の名前と年齢を言った。演奏曲の1つ「さくら」は日本語でも歌っていた。

8. ラムセバンド活動の意義

教員グループは以下のように、ラムセバンド活動の意義を指摘する。

ラムセバンドとしての活動演奏は、障害の有無にかかわらず平等に子どもに高いステータスをもたらすのである。演奏している時、彼らは知的障害をもつ子どもではなく、ミュージシャンとしてのアイデンティティを獲得する。

ラムセバンドは練習を始めた早い時期からコンサートを開催した。教員グループは子どもにとってそれが重要であると考えたからである。つまり、バンドとして一緒に演奏することによって構成員の一体感を意識して欲しいと考えているし、他人のために演奏することが楽しいということを感じて欲しいと思っているのである。

そして教員は「演奏することの喜び」と言うキーワードが意味しているように、完璧に演奏する

必要はなく、ただ楽しんで演奏することが必要なのであると考えている。

ラムセバンドはオイレショー学校の通常学級の子どもに対しても演奏を行ったが、子どもの反応は素晴らしかった。ラムセバンドのメンバーは身近な他者から評価されることを体験出来たのである。他者からの評価を得られることによって、彼らは自信をつける。それは自分自身を信頼する力へと展開する。それらを踏まえて教員は「あなたはあなたで良いのだ」と言う。ステージで賞賛されることが子どもの自信につながっているからこそ「自己肯定感」を形成できると教員は考えている。また他者が知らないような、バイオリンの演奏方法を学ぶという知識も、子どもの自己評価を高めるのである。

教員は、彼らの能力に応じて成長できるように、彼らを励ますことが大事である。やりたくないことや出来ないことを押し付けるのではない。また障害をもつ子どもに対する教授法は明確に計画された段階を経る必要があり、教授においては地道な過程を踏むことも必要である。ゆえにラムセバンドの目標は、それぞれの子どものレベルに合わせた課題を見つけ、そこから次のレベルへ発展させることなのである。音楽という媒介を通じてなら、あらゆる文化や言語を乗り越えることが出来るのであり、ラムセバンドは常に進化している。

また知的障害をもつ子どもがバイオリンを演奏できるようになることは、芸術に触れる機会を増やすなど、子どもの生活の幅を広げ、人生を豊かにする可能性を持っているという点でも注目に値する。

様々な諸要因が有効に機能すれば、障害をもつ子どもの人生を豊かにし、子どもに自信をもたせ、自己肯定感を形成し、新たな自己実現に繋がるのがラムセバンド活動の検討から指摘できよう。

9. おわりに

「ラムセバンドメソッド」の特徴は、教示を色や数字を用いて分りやすくすること、各段階の課題を出来るだけ単純化し、系統的に構成することである。

ラムセバンドのキーワードは「不可能なことは無い」である。ラムセバンドは「全ての人は障害の有無に関係なく、同じ価値を持っている」ことを、バイオリン演奏という形で具体化している。

ラムセバンドの演奏はスウェーデン国内のみならず、国外でも高い評価を得ている。また他者からの評価は、子どもにとって大きな自信につながっている。自信を基礎に、自己肯定感が形成されていくのである。

以上のような観点からラムセバンドの活動は、音楽を用いた知的障害児の自己実現に大きく貢献していると考えられるのである。

註・引用文献

- ¹ 学齢児のみならず広い対象に文化活動を教える学校である。余暇や課外活動の時間における文化の場の提供も行う。「文化」に音楽活動も含まれている。またオイレショー学校の場合のように、基礎学校の音楽の時間を担当することもある。
- ² 特定の学校のみではなく、市内の学校に巡回して音楽を教える教員である。
- ³ 講演用資料 Ramseband Japan 7-17/10 2004および Ramseband Lecture.
- ⁴ パティレコミュン (Partille Kommun)。コミュンとは日本の市町村に相当する自治体であるため本稿ではパティレ市と表記する。パティレ市の人口は2004年段階では約33000人。市のHPは、<http://www.partille.se/>
- ⁵ 1990年の特別教員養成改革により、従来の「特別教員 (speciallärare)」に替わって、より専門性を有した特別教育家 (specialpedagog)」が養成されるようになった。1990年以前の教員養成課程

による特別教員は教員養成改革以降、付加的な研修を受けて「特別教育家」の資格を取得しなければならないが、各個人の研修の状況が確認できていないため、本稿では従来の特別教員の名称を使用することとする。

- ⁶ スウェーデンの学校においては、教育に関わる予算が子ども1人あたりに割り振られており、各学校の子ども数によって、その年の予算が分配される。教育予算の具体的な使用方法は各学校、とくに学校長に任されている部分が多い。ゆえに学校長は割り当てられた予算を考慮し、教育活動を編成する。
- ⁷ 2001年の日本特殊教育学会第39回大会シンポジウムや2004年の大学附属養護学校での講演など、ルドウ校長とロセーン教員はオレショー学校が取り組んでいるインクルージョン教育の実践をもとに積極的に講演を行っている。
- ⁸ スウェーデンの知的障害学校には義務教育段階に基礎養護学校 (grundskolan) と訓練学校 (träningsskolan) の2種類があり、後期中等教育段階に高等知的障害学校 (gymnasieskolan) がある。相対的に軽度の知的障害児が就学する基礎知的障害学校は基礎学校と同じ教科で、個々の子どもに合わせた教育を行う。相対的に重度の子どもが就学する訓練学校は基礎学校の教科領域とは異なり、芸術活動、コミュニケーション、運動、日常活動、活動理解の5つの領域において教育を行う。高等知的障害学校は、国が定めた教育内容には従うが、特別な教育プログラムの検討や、個別の教育計画の作成が規定されている。中心となる教科はスウェーデン語、英語、社会科学 (samhällskunskap)、宗教、数学、体育と健康、芸術的活動である。高等知的障害学校は個別の教育を重視しており、4年制である。
- ⁹ Partille Kommun Barn-och utbildningsförvaltningen, Särskolans organization 2002/03

平成16年 (2004) 11月30日受理

平成16年 (2004) 12月31日発行